毎月11日掲載

防災・減災のページ

むすび塾

巡回ワークショップ　@塩釜・浦戸小中学校

島内の標高 歩いて調査

損保協会協賛　防災マップ作り体験

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は11月24日、巡回ワークショップ「むすび塾」を塩釜市の浦戸小中学校で開いた。東北以外の開催を含め通算49回目。協賛する日本損害保険協会（東京）の安全教育プログラム「ぼうさい探検隊」を取り入れ、全児童15人が校舎のある野々島の標高を調査し、災害発生時の素早い避難を誓い合った。

児童は2グループに分かれて、港近くにある浦戸諸島開発総合センターを出発した。約1・2キロ離れた学校までの通学路や、高台の避難道などを歩き、タブレット端末のアプリを使って、各地の標高を記録した。

1グループは、センター裏手の高台にある熊野神社と、地元で「椿（つばき）ロード」と呼ばれる舗装していない遊歩道を探索した。センター裏の災害公営住宅では案内板を発見。2棟の建物の間を通って高台の避難経路に続く道を「緊急避難ルート」と赤字で記していた。

同行した減災・復興支援機構（東京）の宮下加奈専務理事は「看板があったら要注意。見ると緊急時にどこを通ったらいいか分かる。普段から看板を意識してね」と助言した。

熊野神社の標高は約8メートル。2階建てで高さ約7メートルのセンターを見下ろすことができた。児童は「神社の方が高い」「港の近くで津波が来たら神社に逃げよう」などと話し合った。

別のグループは、港周辺の低地にある道路と通学路を担当した。自宅にいたお年寄りに震災発生直後の様子を取材。最初に島の北側から津波が襲い、住宅地一帯が浸水したことや、近所の住民に避難を促されて助かった話を聞いた。

2グループ合わせて十数カ所の標高を調べたほか、通学路の途中にある震災の浸水エリアも確認した。調査地点の中で最も標高が高かったのは学校の約23メートルだった。

学校に到着後、防災マップを作成。地図上にシート状のチョコレートを積み重ね、各地の標高を再現した。クイズで津波の特性や避難誘導看板など、防災・減災の基礎知識も学んだ。

宮下専務理事は「標高を確かめただけでも、いろいろなことに気付く。これからも防災に役立つものや危険な場所を地図に書き込んで、自分たちの島を詳しく知る活動を続けてほしい」と呼び掛けた。

島内を探検して標高や危険な箇所を調べる児童たち

地図上にチョコレートを重ねて標高を再現した

人口400の浦戸諸島

塩釜市の浦戸諸島は、松島湾に浮かぶ島々を指す。桂島、野々島、朴（ほう）島、寒風沢（さぶさわ）島の有人島と、多くの無人島で構成されている。有人島の人口は2015年8月末現在、計400。震災で津波の被害を受け、人口は3割減った。

主な産業はカキやノリの養殖を中心とした水産業。震災前は観光業も盛んで海水浴客でにぎわった。震災後は営業を休止している宿も多い。

浦戸小中学校は2015年4月、小中一貫校として開校した。前年度までは浦戸2小と浦戸中の併設校だった。特認校制度に基づき、生徒・児童全36人のうち31人が学区外から船で通学している。

小中一貫校 ことし開設

島住民・鈴木宏明さん（68）の話

避難の大切さ語り継ぐ

地震が来たらすぐ高台へ

東日本大震災の発生時は、浦戸諸島開発総合センターにいた。地震の後、赤ん坊から90代のお年寄りまで大勢の住民が椿ロードを一列になって歩き、学校に避難した。途中で、島に押し寄せる津波が見えた。

野々島は高台が少ない。東日本大震災では島の大部分を津波が襲ったが、幸い亡くなった人やケガ人はいなかった。野々島では昔から「地震の後には津波が来る」と避難の大切さを語り継いできた。至るところに高台に上る道も造られた。だから犠牲者を出さずに済んだ。

震災では、地震発生から津波が来るまで約1時間あった。しかし、地震のすぐ後に来る津波もある。どこにいても自分の命を守り、けがをしないように行動しよう。地震が来たら、高台へ逃げるということを忘れないでほしい。自分が助からなければ、家族や大切な人も守れない。

イラスト　東海林伸吾

■むすび塾に参加して

塩釜・浦戸小中学校

【参加して】思っていたよりも、標高の低い場所があった。震災当時の大変さも知ることができた。津波が来たら逃げたい。
＝4年・西村和羅さん

【参加して】標高を調べて、港周辺は低く、学校は高いことが分かった。津波が来そうになったら自分の命を守るよう行動したい。
＝6年・佐藤心さん

【参加して】野々島の危険な場所や、もしもの時の避難場所が分かり、良かった。災害に気を付けて生活したい。
＝5年・渡辺瞳さん

【参加して】防災についてクイズなどで楽しく教わった。津波が来たら、高さを調べた道を使って避難しようと思う。
＝4年・鈴木恵人君

1年・菊池恵佳さん

2年・内海太豊君

2年・佐藤日和さん

2年・鈴木志那さん

2年・本郷幸陽君

3年・及川晃次郎君

3年・小川朋希君

3年・栄田七里美さん

3年・菅井日心さん

3年・中沢千世さん

3年・山木深生佳さん

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に、巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回の「むすび塾」は13日、宮城県山元町の花釜行政区で開催します。

危険箇所調べる学習有効

減災・復興支援機構理事長　木村　拓郎さん

地震はいつ起こるか分からない。子どもたちも自分で身を守る習慣を身に付けてほしい。ただし、小中学校は少子化に伴って統廃合が進み、地域との結び付きが弱くなった。このため子どもたちは、過去の被災状況や対策など、災害から身を守る知識を得にくい。

このような課題を解決するには、学校や通学路がどのような場所に立地しているのかを知る必要がある。今回のように地盤の高さや災害時の危険箇所を調べる学習は有効だろう。

また、学校や児童生徒と、地域との交流も大事だ。地元の人から東日本大震災の話を聞いたり、一緒にイベントや防災訓練に取り組んだりして普段から顔見知りになっておくと、いざというときに役立つ。

ぼうさい探検隊とむすび塾

ぼうさい探検隊はマップ作りを通じて子どもの防災や防犯意識の向上を目指す事業で、日本損害保険協会が2004年に始めた。全国各地で開催し、年1回コンクールで優秀な取り組みを表彰している。

小学校や子ども会、少年消防クラブなどの単位で、小学生と大人が地域を探検。防災、防犯、交通安全の面で危険な箇所などを点検して、地図にまとめる。

社会貢献事業として防災・減災啓発活動に取り組む損保協会の協賛を得て、河北新報社は年数回、むすび塾に探検隊のノウハウを取り入れて開催する。

損保協会は、プログラムを円滑に進めるため、準備作業から当日のスケジュール案などを掲載した実施マニュアルを作成。探検やマップ作りに使う画板やペン、シールをまとめた実施キットを無償提供している。連絡先は損保協会啓発・教育グループ03（3255）1215。